

# 会長企画シンポジウム

「協創的な認知科学研究の未来をめざして」

企画・司会 三宅なほみ（中京大学）

話題提供者	高野陽太郎（東京大学） 片桐恭弘（はこだて未来大学） 鈴木宏昭（青山学院大学） 原田悦子（法政大学） 開一夫（東京大学）
指定討論者	箕一彦（中京大学）

今、人の知についての研究が、これまで以上に大きな意味を持つ時代になりつつある。認知科学の諸研究についても、うまくいった研究の成果を互いに披瀝し合うだけでなく、今後なされるべき研究について互いにそのアイデアを語り合い、進むべき方向を協調的に創造してゆくことが必要だろう。そのような努力によって、認知科学研究は、いままで以上に広い範囲の人たちから「おもしろい」と思ってもらえるようになるだろう。

学会という場合は、普段直接話をする機会の少ない認知科学研究者が互いの顔を見ながら交流できる貴重な時間を提供してくれる。そのような時間の一部を使って、これからの認知科学研究が発展すべき方向を大局的な視点から探るシンポジウムを企画した。

上記5名の話題提供者は、このような呼びかけに応じてくれた方たちである。それぞれの立場から、これまでの研究を踏まえて、やりがいのある認知科学研究とはどのようなものかについて内省、吟味してきた結果を話していただけることになっている。具体的にお願ひしたのは、「（今まだできていなくても）本来、認知科学者が取り組んでいるべき、あるいは取り組んでいると楽しい（あるいは楽しくなくても充実感があったり、責任を果たしている気がしたりする）と考えられる研究」について

- 1) そのテーマはどのようなもので
- 2) どんな方法によって（資金や場所の制約はないものとして）
- 3) どんな結果が出れば望ましく
- 4) それによって、社会にどんなインパクトをもたらせるか

などその具体像を描いて、他の研究者の研究イメージを刺激することである。ご自分の研究を土台に、認知科学はこういう研究をすべきだ、という持論を、できるだけ具体的に語っていただこうと思う。

これら話題提供されたものについて、幅広い領域に見識の深い箕一彦氏にさらに展望を加えていただく。フロアからも活発なご意見を得て、認知科学会の未来を展望するひとときをもてれば幸いである。

謝辞 このシンポジウムには、財団法人栢森情報科学振興財団の助成を頂きました。記して感謝します。